

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成19年
- 月号

毎月23日発行
通巻448号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成19年12月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷 監
★定 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



平成19年11月3日 脱穀風景 見田暎子さん撮影

昭和38(1963)年2月23日 申孝祭法話より

先祖の尊い建国精神を知る

金鷄祭と申孝祭

法主 矢追 日聖(満51歳)

金鷄祭の意味

今日は二月の月次祭で、申孝祭でもありますが、日本の建国におけるの記念すべき日のひとつでございます。もうひとつの記念日としてここでは毎年十二月四日に金鷄祭を行っております。十二月四日というのは、新暦に直してですけれども金鷄の現れた日に当たります。古い人は判るかと思いますが、金鷄勲章についてお金の鷄のことです。

これは、和を以てて武力の争いをやめよということで、言うなれば「大和」の精神で解決せよという神様のお示しでした。これは光でありまして、羽の生えた金の鳥が出たというのは後世の人の言うことです。事実においてそんな鳥はありえないんです。

戦の最中に不思議な光が現れた。火が飛んできたというような意味合いで「飛んでくる火」。神様の霊や靈魂または太陽など、光るもの、燃えるものを称して、「ヒ」という言葉で言い表しているんです。それで、「飛んできたヒ」ですから「トヒ」「トビ」ですね。鳥の中には鷄がいますから、金の鷄が飛んできて神武天皇の弓の先に止まったんだと、後世にそういうことを言っているだけで、事実はそのようじゃなかったらしい。

武力の争いというものを、神様の不思議な力によって平和に収める。金鷄の発祥ということは、和の精神ということをお記念すべき、建国についてのひとつの大

きな事件だったと言えます。金鶏発祥によって戦をやめ、ヤマト（＝大倭）と日向の人達が話し合い円満な解決ができた。

その解決の結論から見ますと、神武天皇という方は九州からヤマトへ婿養子に來られたということになってしまふんです。ヤマトの系統のお姫さんで、三輪におられた媛踏躰五十鈴媛命という方が皇后さんになっておられる。そのような形で新大和朝廷というものができた。我々人間でも、子供が生まれる時には母体に陣痛というものがあって苦しまなければならぬ。奈良のこの地に新しい大和ができる時、ヤマトと日向が武力で争ったということは、言い換えれば陣痛であつたと言えるんですね。

神武天皇は、武力に屈して養子の形になっているんですけど、日本の歴史というものは御用学者がつくったものですから、ヤマトの人達を賊のような扱いをしています。長曾根彦の大君も、ヤマトの賊だと言われているんですね。

第一代に神武天皇がなられたのですが、その当時の社会とすれば相当のいざこざがあり、武力の争いもあつたのだから、やはり後を引くんですね。武力においても、文化や生活の程度など、全ての点において日向よりヤマトの方が勝っていた。戦においてもヤマトが勝っていたのに、なぜ日向から来た者を天皇にしなきゃならないのかと、ヤマトの人達はなかなか承知しなかつたんです。

鳥見山の靈時

御即位の式は柏原（御所市）で挙げられたんです。畝傍の山の麓に、明治になって橿原神宮という官幣大社の立派な神社ができました。今はこれが御即位された場所ということになっているんです。

すが、本当のことを言えば間違っているんです。もつと西南の掖上の方に柏原というところが現在もあるんですが、そこが御即位された本当の場所だろうと思うんですね。橿原神宮の場所は、仮の場所であると霊界でもおっしゃるんです。橿原神宮は近くですから私もお参りします。やはりそこも御祀した参拝所になっているから、神武天皇の御魂はおいでになりますけれども、本当の場所ではないんです。

御即位の式は挙げられましたが、ヤマトの人達についてはいいかない。神武天皇が一代の君としていられるのだということを、いくら言っかけても、なかなか承知しない。四年くらい経つて、ヤマトの人達はようやく神武天皇が新大和の天皇であるということを確認してきて、みんながついていくというような社会情勢になった。そこで神武天皇自ら、自分の家族や一族をみんな連れて、元ヤマトの地神さんであり、神武天皇がおいでになる以前のヤマトの都でもある鳥見谷へ感謝のお祭りにおいでになった。四年も経つてからのことなんです。

この鳥見谷は、讓位すると共に自決して果てた長曾根の大君がおられたところであり、金の鶏というものも出ておるところです。そういうようなところだから、南の柏原の宮から一族引き連れて出てこられた。そして、鳥見の山の中に新しい祀りの庭を開いた。この祀りの庭というのを「靈時」と漢字で書きます。祀りの庭を開いて、大和の土地の神様に対して感謝のお祭りをされた。天皇自らご先祖の靈に対して感謝の祈りをされるということ、日本の歴史これが初めてなんです。このお祭りをされた日が、太陽曆に変えますと今日の二月二十三日に当たるんですね。神武天皇は皇祖天神に対して大孝を述べるとおつ

しゃっているんですね。大孝というのは御恩返しということなんです。建国当時の御恩返しにこへ参つた。述べるとは、申すということです。だから、今日の月次祭を申孝祭と称しております。

祭政一致ということ

宗教上においても、また日本の道徳とか教育とかいうような上においても、今日のこのお祭りは日本国民として非常に意味深いことです。神武天皇がかつての敵の本拠地へ出てきて、その土地の神様に対して感謝の祈りをするということ。これは、この地方全体が天皇の御稜威によって穏やかに治まっていくという行事です。所謂、祭政一致ということがここから始まっているんです。

日本の過去は全て祭政一致だと言われますけれども、それを実行されたのは神武天皇が初めてであります。神様をお祀りすることは宗教的な意味になります。そして、下に「事」をつけて「まつり事」と言う、これは政治ということになります。だから、申孝祭ということが、その祭政一致を具体的に言い表しているんです。

神様をお祀りして御神意を伺い、御神意の通りになるような人間そのものをつくっていく。立派な御神示があつても、それを受け取り実行できる人達がいないとすれば、これは神様がいらないのと同じことなんです。大阪の放送局が立派な放送を流しても、それを受け取るテレビの機械が悪ければ、色が出なくなったりして変な物が映つてしまふのと同じことなんです。だから、祭政一致ということをやかましく言われるんです。

人づくりで一番大切なことは宗教なんです。宗教によって人づくりをしていかなければならない。申孝祭の裏に流れておる神武天皇の精神とか、

あるいは祭典行事の意義というものが、今日の日本民族の中になければならない。我々日本民族には、他の民族には真似できない先祖の尊い精神というものが、心の中または血液の中に流れておるといふことを、よく覚えておかなければいけない。昔の人達が身を以て実行して示されてきたものが、我々の血となり肉となつて、今ここに大倭の宗教というものができあがっているんです。

今日の朝がたに、鳥見山の霊時と言われている大倭神宮へお参りしてきたんです。人間的に言えば、ちよつとお参りしてきただけのことです。今日には神武天皇と、そしてまた皇后の媛踏鞴五十鈴媛命も一緒になつて、お見えになつておつた。私はたまたま挨拶に参つただけのことですけれども、こういうことは珍しいんです。おそらく初めてだと思つておられます。神武天皇はいつもお見えになるんですけれども、皇后と連れ立って正面に座つておられるということは、今までなかった。これは、大倭の宗教の中で、申孝祭の意味を伝えていかなければいけないということだろうと、私は思っているんです。

霊界と一体になつた古代の歴史

神武天皇が架空の人物であると言う学者もいますけれども、そんなものは別に問題にしないでいいと思つておられます。日本の古代の歴史というものは、歴史と霊界の方と一緒になつておられる面が多いんです。だから、歴史的事実だけを辿つていくと、『古事記』や『日本書紀』のような場合でも年代の食い違いがあったり、常識では割り切れないことがあつたりして、単なる神話に過ぎないという面が出てきたりする。

稗田阿礼という人が大和におられたんです。奈

良朝の頃ですけれども、霊界のことが見えるし聞こえるというような語り部の家柄に生まれたい。非常に暗記の上手な人ということになつておられるんですが、二十六歳か二十七歳ぐらいで亡くなつておられます。学者は翁だということなことを言つておられますけれども、事実は女性の独身者で処女でした。この稗田阿礼の口から出てくる色々な物語のようなものを太安万侶が聞いて歴史のような形で編集したのが『古事記』です。

そういうようなことがあつて次に、『日本書紀』が編纂される時にはシナの学者がたくさん入つておられます。『日本書紀』になつてくると、年代を追つて記録されている。太安万侶も入つておりましたし、舍人親王のような人もおられたらしいんですが、大体はシナ人が一生懸命に取り組んだ仕事なんです。シナの歴史年代と日本の歴史というものを取り合わせて、過去に遡つて編纂された。どうも干支をひとつ繰り替へておつたね、六百年の狂いがあるようなことも学者が言つておられるんですが、これも割合根拠のある話ですから、私も否定しませんけれども。

神武天皇からずつと歴代天皇の寿命を、とにかく六百年の食い違いだけ直さなあかんというので、かなり引き延ばしておられるんです。奈良朝の頃になつてくるときつちりしてくるんですが、崇神 垂仁 景行 成務天皇辺りのところまでが、どうもおかしい。これは年代の問題ですよ。年代だけ食い違つておられるんです。『日本書紀』を編纂する時に稗田阿礼が生きておられたら、日本古代の歴史というものが、もっと歴史らしくなつたと思つておられます。

『古事記』というものの中には霊界のことも現実の過去の歴史もあり、非常にややこしい。それを今の学者はすべて歴史だと思つて見るから、案

外おかしなところが出てくるんです。仏教やキリスト教に経典があるように、『古事記』などを日本神道の経典として扱われたら、日本の古代史においても宗教的に教える面が出てくるんです。私も何とかせなあかんとは思つておられるんですけど、これもその時期がくれば御神示があるでしょうから、それまでは手をつけられないでいるんです。

自分を作り上げるのが宗教

大倭は純日本宗教として立つて行きたいと思つておられます。日本の過去の歴史や過去の神話というものでも、宗教的に立派なものがたくさんあるんです。宗教の中に取入れたいと思つておられるんです。今日は神武天皇と皇后が正面にお座りになつておられたということも、これからの大倭の行き方に対して、また霊界からお指図があることだろうと思つておられるんです。

ここでいつも申しますように、宗教というものは人づくりが根本ですから、皆さん方がいかなる商売をしておられるか、また社会的にどんな地位におられるか、自分という人間をつくらなければ、これはもう何にもならないんです。ただ神様祀つてさえいれば、神様さえ拝んでいたら御利益あるとか考へておつては無駄なことなんです。神様にお参りする、あるいは合掌するということは、みんな自分のためです。たとえ一歩でも神様の心に近づけるような人間になるために、手を合わせて頭を下げる。それでなければ意味がないんです。自分をつくり上げるということなんです。自分というものを自分で鞭打つて向上を図る対象というものが宗教であり、神様であり仏様であるんです。ところが信仰している多くの人を見た場合、人間的に向上するのではなくて、神様とか仏様の力を

借りて苦しみから逃れさせてもらおうとか、経済的に豊かにしてもらおうとかいう風に、自分というものを忘れてしまっている。神様とかを頼りにして自分のことを考えないという生き方をしておれば、地獄に堕ちていくのは決まっている。

親鸞聖人という人は他力本願を唱えられた。弥陀浄土へ行って、我々が成仏するというのは結構なことです。けれども、やはり一切のものを忘れて、自分の心境が空のような気持ちになってたね、ただ阿弥陀一仏にすがるといふ心境になってこなければ他力本願は通用しないんです。親鸞聖人は、十悪極悪の罪人であっても、臨終の時に念仏を心から唱えれば西方の浄土に行けるとおっしゃっています。けれど、臨終の一念において、さつと過去は一切のことをすべて忘れて、仏様のような心境にはなれないと思う。

そうなってくると、他力本願とはいふものの、それは反面自力本願にもなっておるんです。自分がそれだけ弥陀にすがるといふ悟りがなければ、相手も救ってくれないということになる。ですから他力本願とはいふものの、やはり自分で修行し、自分で成仏できるだけのひとつの悟りを持たなければ、西方の浄土に行かれないということにもなるんです。自分ということを忘れて、他人の力によつて自分がうまい汁を吸おうというような横着なことを考えると、人間はだんだんと墮落して神様から遠ざかっていく。

大倭の宗教というものは、諸々の神々の御神意を奉体して、私が教えを説くんです。神様は人間をつくれということをおっしゃるんです。皆さん方も自分が神様になれるような心境で合掌すると同時に、常に自己を振り返り、自分が一步でも神様に近づきような心がけを持って信仰を続けて欲しいと思います。

(文責 編集部)

平成19年10月28〜29日

大倭会第296回文化行事報告

淡路島・徳島方面へ

淳仁天皇陵をお訪ねした時の事

あじさい色 杉本 順一



齋藤正宏さん 写



②



③

- ②8日 北淡震災記念公園・野島断層館、伊弉諾神宮 (写真①)、早良親王高嶋陵 (写真②)、高田屋顕彰館、淳仁天皇陵 (写真③)
- ②9日 鳴門海峡、大谷焼窯元、霊山寺、藍染工芸館、阿波おどり会館 (写真④) と盛りだくさんの旅行です。



④

⑤

私達の一行も他から見れば単なる団体さんだが、それぞれの地にこもる魂魄は、参加する人の身に伝わるほどの強いものが有ったようだった。大倭会文化行事の目的の一つはその地の霊界人との交流 鎮魂慰霊である。今回も行く先々の土地にご縁の霊人達と交流しながらのバス旅行だった。「霊界には時間が無い」とは法主さんのお言葉だが、各地で交流した霊界人達も、時代(時間の流れ)の感覚を超えた存在であった。つまり色んな時代の霊人達のはずなのに、その時間差がない存在として私には感じられた。

「淳仁天皇 (西暦733〜765) 10 33) 天武天皇の孫。母は当麻山背。名は大炊王。厩位され淡路島に流されたため淡路公、淡路廃帝とも。七六四年恵美押勝の乱の直後に皇位を廃されて淡路に移される。翌年逃亡に失敗し同地で没した」(山川出版社 日本史広辞典より)

28日最後の訪問地が、淳仁天皇陵であった。陵の近くでバスを降りざろざろと正面に向かう。皆さんそれぞれに挨拶をしておられたが無数の小蠅が邪魔をしてゆつくりとした気持ちで挨拶をさせてくれない。皆そうそうに正面を避ける。私も挨拶しようとしたが小蠅がうるさい。

「ワレノミハ ココニアラズ ヒガシノホウ」と淳仁天皇さんが言ってくる。廃された天皇にしては、こゝは立派過ぎる御陵だとは思ったが……。

この後、淡路島海上ホテルへ到着。食事の後は恒例の演芸会オンパレード(写真⑤カッパ踊り)。元気に舞台の裏方をしている藤田啓子さんが出されていた食事を口に出来なかったことに気がつかなかった。部屋に戻って寛いでいると藤田さんが松本モトさんに付き添われて私達のところに来られた。藤田さんの様子が普通でないのは直ぐに分かった。昼間お訪ねしてきた各所ご縁の固有霊達がぞろぞろ付いてきたようで、それぞれを鎮魂しても、なかなかお仕舞いになるどころか厳しい表情が強くなってきたのである。

奥にあるのは何だろうと考えていると、どうも思いもしなかった淳仁天皇の母が名乗ってこられた。そのことに気が付いて挨拶してみたら、少しづつ藤田さんは何時もの表情になってきた。私もやっと布団にはいることができた。

二日目も良い天気の中、最後の阿波おどり会館に入ると、徳島市在住の大倭会会員、近藤充智さんが元気に私たちを出迎えて下さった。

これで予定どおりのコースを無事終了、バスは帰路についた。

数日後、藤田さんが、もう一度淡路路に行つて、淳仁天皇とその母当麻山背お二人の御陵めぐりをしませんかとのことで、私も同意しました。

11月5日、再度の淡路島訪問。母 当麻山背さんのお墓では「我が子と会えた喜び」を感じ、大炊神社では淳仁天皇より「ワガミハ ココニコモルトモ ココロハ ハルカ オオヤマト」との心を感じた時、再度の淡路島訪問が納得できた次第

です。

参加できた嬉しさ

奈良県橿原市 水野勝美

今迄の文化行事には、急用のない限り参加していましたが、去年の一泊旅行は、私事で参加出来なく非常に心残りでした。

今回の旅行の北淡震災記念公園では、自然災害の恐ろしさを改めて認識致しました。

大倭会の文化行事というのは他の旅行と違い慰

めがけの行事という感じが、

色とりどりの花火が、

夜空を彩り、

心に残ります。

大倭会の文化行事というものは他の旅行と違い慰

めがけの行事という感じが、

色とりどりの花火が、

夜空を彩り、

心に残ります。

大倭会の文化行事というものは他の旅行と違い慰

めがけの行事という感じが、

色とりどりの花火が、

夜空を彩り、

心に残ります。

大倭会の文化行事というものは他の旅行と違い慰

めがけの行事という感じが、

色とりどりの花火が、

夜空を彩り、

心に残ります。

大倭会の文化行事というものは他の旅行と違い慰

めがけの行事という感じが、

色とりどりの花火が、

夜空を彩り、

心に残ります。



しく前日から台風襲

備中神楽の十四年—— この年の終りということ

岡山県真庭市美甘 湯浅芳郎

平成六年から始まった備中神楽、今回を以つて一応の区切りとなりました。その間毎年、岡山から遙々来ていただいた社中の方々、準備から後片付けまで温かいご協力を頂いた大勢の皆様から心から感謝申し上げます。思い出すと、平成六年夏、

故郷岡山の美甘で一大イベント、「旦の火祭り」をやりました。法主様、鈴月カーさんも来られました。故大倉佐和子さんの箏とシンセサイザーの演奏に世界で活躍中のインド舞踊家シャクティさんが夜の闇の中を狂った様に舞いました。屋外ステージで、折悪

霊の旅で、大倭に縁のある人達がその場所に行く事に意義があり、又参加する事が大事な事だと聞いていますが、どうでしょうか。私には解りませんが、先輩達が計画して続いている文化行事をさらに続けて頂きたいものです。

来年の一泊文化行事は、300回という節目の年ですので、多くの方々に参加して頂き盛り上げて行きたいものです。幹事様には大変と思えますが、宜しくお願い致します。

今回参加出来たことを嬉しく思います。

来の模様、法主様に大層お世話になりました。三〇〇人の観客、「失敗したら村に帰れなかった」(湯浅晴子談)。お蔭様で大成功。

そのお札に美甘の母(※田中一二三さん)が平谷照子さんたちの賛同いただき法主様誕生祝に大倭に神楽を呼ぶことにしました。法主さまは初回平成六年と七年、二回楽しんで頂きました。鏡開きをし、お神酒も楽しみました。最期の年は水野勝美 高橋良美さんの肩車で瑞光院から降りてこられたお姿を思い出します。カーさんもその後もお元気で楽しまれました。亡くなってからも一番前に法主様、カーさんの座布団を置きました。十四年間、演者も観客にも故人となった方も多いが子供は大きくなりました。

今年も毎年の演目。導きの舞に始まり猿田彦命、奇稲田姫の舞、おろち退治等と盛り上がりました。終了後の会館での打上げ、今回は全員に思いを語って頂きました。翌朝は出演者にいつもの玄徳院から届いた心温まる朝食を食べていただき、お見送り。堅く握手をし再び再会を期しました。

人生色々な終りや別れに遭遇する。温かいものに包まれた「終り」、「別れ」は本当に素晴らしい。「終わることの心地よさ」さえ感じた次第です。

★☆☆☆☆ フレイン・ピープル
Plain Peopleと呼ばれる人々

もうひとつのアメリカ・もともとのアメリカ

東京都 矢部 顕

★☆☆☆☆
風ぐるま

広大なとうもろこし畑のむこうに、もうすぐ夏の陽が沈もうとするころ。扇風機と裸電球が天井からさがっているだけの、催しの看板もなく、なんの飾りもない質素な、はじめは倉庫かとも思った畑のなかの大きな建物。コンクリートの床にならべられたパイプ椅子に500人くらいの家族が、私語ひとつなく、賛美歌の本を携えて開始を待っている。右側が女性、左側が男性の席。

★☆☆☆☆
 なんのアナウンスもなく、前に300人くらいの若者が入場し、指揮者が登場して、やがて賛美歌の大合唱が始まった。伴奏のピアノがあるわけでもなく、ただ、美しい歌声だけが響き渡った。1〜2か月に一度開催される大切な歌の集い。

アメリカはもともと、ヨーロッパから信教の自由を求めて移住してきた人たちでできた国だ。初期の頃は、キリスト教のなかでもプロテスタントのたぐさんの宗派の人たちが海を渡ってきた。そのなかにメノナイトと呼ばれる人々がいた。

★☆☆☆☆
若者の歌のつどい

男性は白い長袖シャツに黒いズボン、黒い革靴、黒いハット。女性は地味な色彩のロングドレスに黒いストッキング、黒い革靴。頭には白いカバリーング。みんな同じような服装をしていて、日本の作務衣を着て雪駄をはいているのは私ひとり。ここはペンシルバニア州、南の州境に近いウエンスポロという田舎の村。保守的メノナイトの教会が合同しての集い。我々が普通にする娯楽、例えばレジャーの数々などは拒否しているの、唯一歌を歌うことは若者の楽しみようだ。かつてアーミッシュの人々が多く住む村に滞在したとき、近くの家に馬車がたくさん集まってきた若者の歌の集いが開かれ、歌声が聞こえてきたことを思い出した。かれらの歌は英語ではなくドイツ語だった。それよりもはるかに大きな規模。

★☆☆☆☆
服装に表れる聖書のことば

保守的メノナイトの人々のライフスタイルは、現代的メノナイトとはまったく違う。服装が一見アーミッシュと似ているので、一般的にアメリカ人で違いを知る人はほとんどいない。日常的にこのような服装をしていて、教会へ行くときだけのものではない。肌を見せることを嫌うのは昔の伝統が残っているのだろう。少女たちが川で水遊びをするときもドレスを着たままだ。

洗礼を受けた女性は頭にカバリーングをしているが、少女たちはみんな髪を三つ編みにして可愛い。髪を切ることほしくない。外出するとき黒いボンネットをかぶる。ホームステイしている日本の女の子はドレスを縫ってもらって、すっかり家族の一員になつていて。男性はアーミッシュのように髭をのばすことはしない。これらの服装を着ることはその根拠を聖書にしている。以前に私が滞在した家庭は現代的メノナイトだ

つたが、特に若い世代の現代的メノナイトの服装はもうその習慣もみられなくなっている。

★☆☆☆☆
虚飾を廃する質素な生き方

服装ばかりに目がいってしまおうのだが、彼らはいへん礼儀だ。陽気なアメリカ人の象徴ともいえる「ハイイ」 という簡略化された挨拶はない。たとえば夕方、出会うと必ずきちんと「グッドイブニング」と言われ、かえってまごつくくらいだ。服装だけでなく、言葉も、生活スタイルも、古き良き伝統がいきびっていることを感じる。

虚飾を廃することも聖書にもとづいている。教会はメノナイト チャーチと看板に書いてあるところもあればメノナイト ミーティング ハウスと書いてあるところもある。正確にはミーティング ハウスだそう。建物もきわめてシンプルで祭壇もなければ十字架もない。花もオルガンもない。演台があるだけだ。神は教会の建物にいては、心は心の中にいる。アーミッシュは教会の建物さえもたず家庭でもちまわりだが、お葬式に立ち会う機会があつたが、遺影もなければ花もない。棺が正面におかれているだけだった。だが心のこもつたお葬式だった。

★☆☆☆☆
 女性は化粧もしないが美しくエレガントだ。エングージングなどもしない。自動車もすべて黒い色のものを使っている。Plain People (一飾らない質素な人々) と呼ばれる所以だ。閉鎖的な生き方をしていっているわけではない。教会が大型バスを所有して、教会間の交流に使ったり、ルイジアナ州のハリケーン被害地域に交代で出かけて災害復旧の応援をしている。家具工場ではいろんな宗派の人がともに働いていた。2番目にお世話になったジーマーマン家のご主人

は教会の牧師だった。現代的メノナイトと違い専門職としての牧師はいない。この意味はたいへんに大きいと思う。彼はふだんは大きな家具工場を経営している。

情報は知らない

生活のうえでアーミッシュのように電気の使用を制限しているのではないので、なんでもある。ただし、テレビ、ラジオ、インターネット（コンピュータはビジネスで使用する）は使用しない。CDプレイヤーは賛美歌を聴くためにある。新聞も読んでいる人は殆どいない。天気予報を聴くための専用ラジオらしきものがあった。自動車のラジオは取り外してあった。したがって世間で起こっているニュースを知っているわけではない。

最初にお世話になったローリー家のご主人は、長年にわたって学校の教師や図書館司書をしてきて、何冊もの本の著作をもつメノナイトの歴史を研究している学者で、外国での交換教師の経験をもつ知識人であるが、9 11同時多発テロもアーミッシュの学校の銃撃事件も知らなくて、外国にいる友人の電話で知った、と聞いて本当に驚いた。私たちは、アメリカで起こったこれらの事件の発生を同時的に知るほどの情報に接している。それが現代的な生活だと思ってきた。情報を知らないことは社会生活から落ちこぼれていくと思いきや不安になる。たくさん情報人間を幸せにすると信じてきたが、はたしてそうなのか。考えてみれば、本当に必要な情報がテレビなどで得られているかといえば、そうではないのではないか。

彼らは、テレビなどの情報は悪いもののほうが多いと考える。凶悪な事件が起こるのも、ニュースでそんなことばかり報道するので、真似る人が出る。そんなものに邪魔されるよりも家族の会話

や団欒のほうがたいせつだと考える。本はどこにうちにもたくさんあった。

このような家庭にホームステイした日本の中学生の感想文「テレビがないと生きていけない、と思っていました、そうではないことがわかった」。

Plainなものを求めて

バターズ一家は、母も娘も柄ものではなく無地のドレスを着て、父と息子は黒い帽子とサスペンダーをして、保守的メノナイトのなかにあっても、もっとも古いスタイルを守っている。この春に、教会の友人たちと来日した折お世話したが、東京の街を歩いていると、そこに『大草原の小さな家』の時代が突然現われたかのような風景だった。

バターズ一家は5年前までは、インディアナ州に住んでいて、他の宗派だった。現代社会の矛盾や子どもの教育のことを考えたあげく、Plainな生き方をしていくメノナイトに惹かれ、宗派をかえてそれらの人々がたくさん住むペンシルバニア州に転居した。インディアナ州の友人たちは言ったという、「クレイジーだ」と。

歴史的平和教会

国家と国教会の弾圧からのがれ、ヨーロッパから信教の自由を求めてアメリカに渡ってきた苦難の歴史をもつ彼らメノナイトは、それ以降300年間の時代の変化に対応する考え方は少しずつ異なってきた。現代的(Non-Plain)、保守的(Plain)の二つだけでなく、その中間的なものもふくめてずいぶんさまざまなグループに分かれてきた。しかし、お互いに違いを認め尊重しあってきた歴史をもつ。アーミッシュもそのひとつだ。大倭紫陽花邑のような生活共同体をつくつ

ているグループもあるようだ。

クエーカー（フレンズ）、ブレザレン、メノナイトは「歴史的平和教会」と自他共に認めるように、絶対平和主義で良心的兵役拒否してきた歴史をもつ。どれだけ国家との間でのトラブルが生じたかは想像を絶するものがあるだろう。

急増する教会人口

保守的メノナイトやアーミッシュのグループの教会人口は急増している。データを見ると1989年に99,530人だったのが2005年には192,217人とあった。他のグループはこの何倍もいるがあまり増えていない。

現代社会の最先端を行くと思われているアメリカで、現代社会のライフスタイルとは別の価値観をもつ生活が先細ることなく急増しているのは、どうしてなのか？

凶悪犯罪、精神の病、麻薬、教育困難、家庭崩壊、離婚などなど、現代社会の象徴ともいえるべきアメリカ社会のなかにあって、それらと無縁の精神的共同体を形成して暮らしている人たちがいる。もうひとつのアメリカ、いや、もともとのアメリカというべきなのか。

信仰を生きる

教会のまわりをとりかこむように生えている樫の大木では蟬時雨。参加者はスピーチにメモをとりながら真剣に耳を傾けている。子どもとて始まる前から私語をする者はいない。賛美歌を歌い、祈りをささげる。弾圧と苦難の歴史をのりこえて、連綿と続く暮らしの営みと信仰が生きていることに想いを馳せる。礼拝が終わったらお互いにあいさつをして談笑を楽しむ。300年間、この信仰の暮らしは変わっていない。

A W T C 日誌

はともよく、もち米 うるち米合せて八俵半とのこと。4時より大倭会幹事会。

11月24日 午後6時半より拝殿において第14回「備中神楽」。

今回をもって一区切りとされるそうです。永年お世話して頂いたこと、またお神楽を伝承されてきた多くの古備国の先達に感謝申し上げます(5頁参照)。

11月28日 午後2時より大倭病院の上半期中間決算報告。

11月29日 今年も熊田義見、高橋良美、二人の手で奥津斎庭の神籬に龍王の寝床となる新藁が敷き詰められました。

12月1〜2日 「NPO法人むすびの家」の企画した、故鈴木重雄さんの故郷、宮城県の唐桑

町(今は気仙沼市に合併)への旅に19人が参加(本紙編集部の岸野を含む)。鈴木さんはハンセン病回復者でありながら34年前、唐桑町長選挙に立候補、敗

れはしたものの、わずかな票差まで支持を得たという人物です。交流の家建設時の紫陽花邑

にも度々来邑されています。12月4日 大倭神宮で金瑠祭。

祭主の矢追家麻呂教長さんが公用で十津川村へ出向かれたため、留守役の皆で金瑠祭が行われました。このあと戻られた教

長さんがお参りをされました。年末年始、昇ちゃん横須賀市の弟さん宅へ帰省予定のため、夜行バスの切符を買いに行

きました(28日出発)。

会として掃除祓をしました。大倭安宿苑では

11月23日 現在建設中の「介護付ケアハウス茂毛蒞園」上棟式。(菅原園)

11月17日 奈良市のふれあい大会に参加。

12月2日 奈良県障害者作品展を見に奈良県文化会館に行きました。(須加宮寮)

11月11日 大イベントの家族交流会。食事やビンゴゲームで盛り上がりました。

11月29日 信貴山観光ホテルで同じ奈良県内の青垣園との交流会に25名が参加。(長曾根寮)

11月16日 一人ジイバンド(キター)弾き語り)を楽しみました。11月17・28日 フレンチトーストのおやつ作り(ディサービスにて)。

俳句の風物 上田森彦(97歳) 冬海に新聞全紙浸り浮く

山口誓子 芭蕉以来の発句が、明治末に風景風物を写生する俳句になり、やがて情や思いを潜める詩的俳句が生まれた。

行けば遠き声寄す冬の海 森彦(八重垣園)

11月27日 8名が岩船寺と浄瑠璃寺へ行きました。

12月1日 開設12周年記念日。俳句投稿箱より 「生かされて感謝の日々や冬日和」「若者や

おせち料理に顔向け」「秋日和 晴着姿の七五三」

A T M i C

* 年始祭(大倭神宮) 1月1日(祝) 午後1時から紫陽花邑内の諸霊へご挨拶。

午後2時から大倭神宮にて。

* 月次祭(大倭神宮) 1月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四六九回祓会 1月13日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 大とんど 1月14日(成人の日) 午前10時より大本宮西の斎庭にて。

* 月次祭(大倭神宮) 1月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大倭大本宮) 1月23日(水) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

編集後記

▼法主様が生前「わしは何時と同じ事を言ってるだけやで」と仰っていた言葉をそのまま鵜呑みしていた私ですが、残された

法話のテープを一足先に聞かせてもらいながら作業をしていて、法主様が簡単に言っておられる言葉の深さ、重みを感じる

ようになってきたこの頃です。大倭64年も皆様にとって良い

年になりますように。(のん)

新年のご挨拶を申し上げます

大倭紫陽花邑が産声をあげて満六十年が経ちました。

地下水の如く 清く流れ

紫陽花の如く 美しく咲け

邑人にとっては耳慣れた法主様のお言葉です。

今一度己の心を研ぎ澄ませ、このお言葉の真意と

実践に向かいたいと思います。

今年もよろしくお付き合ってください。

大倭六十四年 元旦

大倭紫陽花邑

代表 矢追 家麻呂

邑人一同